

日本紙相撲協会より力士到着!

十一月二十二日、力士交流の一環として日本紙相撲協会から三名が加古川に到着、さらに翌日には友砂理事長直々に一名を譲り受け、合計四名が加古川紙相撲協会に合流した。

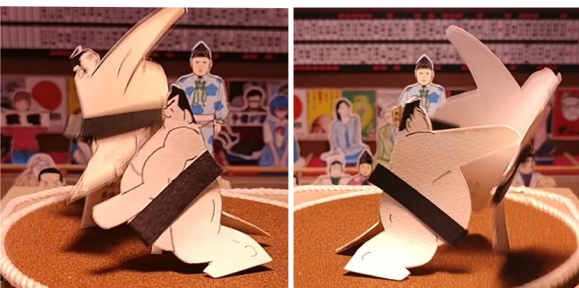
はじめに見る紙相撲の本場の力士たちに親方衆も興味津々、さっそく相撲を取らせてみるも皆「様に唸り声を上げた。攻めが早くて重い。ウチの力士たちは完全に体力負けしている。(若ノ城親方)」「みんな自分の負けな型を持っている。ツボにはまった時は本当に強い。(西の国親方)」「下半身が柔軟で粘りがある。なるほど、紙の違いがこういうところに出るのか。」(芳登親方)

四人の処遇について、当初は理事長付きの稽古相手(指導者)という予定であったが、井上相談役の鶴の一声で第十六回本場所から参戦することが決まった。



「これは我々にとって願ってもない機会だ。こはせむ番付に加わってもらって本場所を取ってもらいたい。その方がウチの力士たちも学べると思う。盛り上がることも間違いなし!」井上相談役の話

四名は特例として幕下最下位に付け出されて五番勝負に臨むことが決まった。なお所属部屋については当面は既存部屋に預ける形とし、あらためて加古川友砂部屋、加古川鹿賀乃部屋として独立させることが理事会で承認された。



加古川に到着した日本紙相撲協会力士団。徳鶴(左)と鹿ヶ岳(右)



加古川紙相撲協会井上相談役(右)と日本紙相撲協会友砂理事長(大阪難波おてん屋たこ梅にて)

日本紙相撲協会との交流はじまる

十一月八日、井上相談役のもとへ日本紙相撲協会の理事を勤める鹿賀乃戸親方からメールが入り、両協会が力士交流と親善を図っていくことで合意、さっそく当協会から力士を派遣することが決まった。

井上相談役は「三十五年以上前、私は日本紙相撲協会初代理事長の徳川さんの著作を通してこの世界に入った。現在の理事の皆さんはその徳川さんの直弟子のような存在。そのような方と交流する時が来るとは夢のような話だ」と興奮気味に語った。

南の海理事長は「当協会にとって、日本紙相撲協会はいつもお手本であり目標だった。実際に感慨深いものがある。力士交流は今後の協会の運営にとっても極めて重要な意味を持つものとなるに違いない」と真剣な表情で語った。

さらに同月二十四日、井上相談役は友砂理事長、住之江親方、九十九親方との懇親会に招かれ、電動式土俵を披露。初代理事長の徳川さんとのエピソードや興味深い裏話、力士作成や弟子の育成の話など大いに盛り上がった。友砂理事長からは「本場所を見においてよ!」とウチに泊まってほしいから!と改めて



→友砂理事長がカフェでお手本として作成した紙力士。その名も「道頓堀グリコ」

本場所観戦の招待を受けた。

翌月二十二日に再び友砂理事長と懇親の機会があり、力士作成についてさまざまなアドバイスを享受、その後は理事長お気に入りのおてん屋さんでさらに交流を深めた。

加古川紙相撲協会設立から九ヶ月にして徳川式紙相撲の家元・日本紙相撲協会との交流が生まれ、当協会にとっては早くも重要な転換点を迎えたことは間違いなさそうだ。

本協会から四力士を派遣 加古川部屋創設認可される

先に東京からやって来た四人と互角レベルでないに到底通用しない。ところがそこからが大変だった。もう何人作ってはゴミ箱行きになったかわからないよ。強い力士を作るのは狙って出来るものじゃないよね。でもその苦勞の甲斐あって、やっと満足行く力士ができた。まあ互角とは言わないが、四分六分くらいの勝負にはなっていると思う。特に鶴の里がいい。ウチなら大関を狙える器じゃないかな。わははは!

「いや、苦勞した。せつかく送るからには先にはまだ一年足らず。もっと謙虚にならないと。ローマは一日にして成らず、石の上にも三年だよ。」

その後、日本紙相撲協会から「加古川部屋」新設が認可されたという連絡が入った。来年一月二十七日に新弟子検査が行われ、四人のうち二名が正式に新弟子として入門を認められる。

さあ、いよいよ新しい歴史のスタートだ。

加古川紙相撲協会から日本紙相撲協会へ四力士が送られた。まず先遣隊として平之莊浪ノ助ひらのそう、なみのすけ、志方山登三しかたやまとうぞう、さらに後発隊として鶴ノ里貞光(つるのさと)とさだみつ、輝錦孝一郎(てるにしき)こういちろうが順次派遣された。

四人の選抜に当たり、井上相談役は次のように語った。

一方、審判部長の文の里親方の見方はやや悲観的だ。

「井上相談役は能天気だからお氣乗だけどもし派遣した四人がまったく歯が立たなかつたら加古川協会がどうなってしまうか心配だ。昔大阪相撲が東京相撲に吸収されたのと同じことにならないか。」

そのことを伝え聞いた井上相談役は笑い飛ばしてこう言った。

「何言ってるの。通用しなかつたらまた作っ

もちろんまだまだ改良の余地がある。特に取組中はモーターの回転数が一定なので、相撲が単調になりやすい欠点がある。できれば立ち会いには土俵の動きをもっと激しくしたい。取組中も微妙に強弱がつけられるようにしたい。そうすればもっと変化に富んだホンモノらしい相撲が取れるだろう。

でも、そんな高度なこと、自分でできるだろうか。この記事を読んで腕に覚えのある方がおられるなら、ぜひ知恵をお貸しください。

くらいうれしかった。(もちろん、家族は無反応...)

こうして完成したのが「てんくん一号」で、今はもう少し改良した「てんくん二号」を使っている。



以前は本協会でも土俵は手で叩いていた

電動式土俵について

加古川紙相撲協会の特徴といえは、電動式の土俵を取り入れていることだろう。時々「土俵の内部はどうなっているの?」という声を頂くことがある。

実を言うと、本協会において電動式土俵を取り入れたのは第十三回本場所の九日目からだから、つい最近のこと。それまではずっと手で叩いていた。

紙相撲は別名「トントン相撲」と言われるくらい、土俵は手で叩くものとされてきた。ところがこれが実に難しいのだ。土俵上に組んだ力士がその力量を發揮するには、土俵を左右均等に叩くことが前提になっている。もし力加減がどちらかに偏っていると、当然勝敗にも大きな影響を及ぼすのだ。左右均等に叩くことは簡単なことではな

いいや、人間業ではないのかもしれない。人間には元来利き腕があつて左右同じようには動かせないものだ。

細心の注意を払って土俵を叩いても、どうしても勝敗が偏ってしまう。東方力士(あるいは西方力士)が何番か続けて勝つと不安でしやうがなくなる。しまいは、自分の叩き方が悪いのか、あるいは土俵に問題があるのか、それともまたま土俵が偏っただけなのか、わけがわからなくなる。

「自分には均等に土俵を叩くことは無理なんじゃないか」という思いから、電動化を模索するようになった。単に土俵を振動させるだけだと、紙力士はちゃんと相撲が取れないことは昔実験してわかつた。手で叩いたときと同じように左右交互に土俵を上下運動させることが必要なのだ。

試行錯誤の末、何とか使えそうな土俵が出来た時、感動のあまり動画を撮って、「お父さんはやりました!」と家族に報告した

現代、ビジネスマンの生き残る技術「ボケカ」

南出屋 念 著

アンソニー・荒嶋 著

元高紙相撲力士団総裁が、説く、全人類の愛のメッセー! ジー! 増刷決定!

真の愛とは Truly in Love

TG

